

「時が来るまでのこと」

ダニエル 11 : 20 - 24

April.18.2021

## ダニエル 11 : 20 - 24 (パワポ)

### Preface

受難週礼拝、イースター礼拝、教会創立 67 周年礼拝と続き、4 週ぶりのダニエル書 11 章となりますので、少し復習から入って行きたいと思います。

ダニエル書 11 章は、未来に起こることについて書かれているがために預言書（予言書）とも言われているという話を致しました。

一義的には、2500 年前当時のイスラエルの民とダニエルにとっての未来であり、ダニエル没後 400 年間に渡って起こる中東世界、ヨーロッパ、アフリカ、アジアの世界情勢の変遷について告げています。

ただ、すべての歴史的事実について記録することは出来ませんので、主に、イスラエル民族に深く係わる国際情勢について記しています。

中でも、ダニエル自身も高級官僚として仕えたペルシア帝国と、ペルシアを遙かに凌駕するヨーロッパからアジアに至るまでの膨大な領土を治めたギリシア帝国と、その隆盛を極めたギリシア帝国が 4 分割され、その 4 つの領土の中でも際立つ権勢を誇った北アフリカに位置するエジプト・プトレマイオス王朝とシリア・セレウコス王朝の栄枯盛衰について記しています。

私たちからすれば、もうすでに過去に起こった遠く離れた国々の歴史のことで、見たところ私たちとはそんなに関係性を見出せないようにも思えますが、これが不思議なことに遠く離れた良く知らない国々の過去の出来事という枠内にとどまることはなく、

むしろ、今現在、私たちの周りで起こっていることや、またこれから起こることとも密接に重なり合っているということをここまで読み解いてきました。

これこそ聖書が神の言葉である所以ですし、すごいところですし、イエス様が「天地が消え去っても、聖書の言葉の一点一画も決して消え去ることはない」と仰った言葉が思い出されます。

時も場所も超えて、神の言葉は、いつ、どこでも、どんな人たちにも当てはまる真理です。

ただしこれを逆に言いますと、国が変わろうが、人が変わろうが、時が変わろ

うが、行きつくところ、本質的に全然変わらない世界・社会の有り様、人となりということにもなります。

特に私たちがダニエル11章の前半部分で見てきた本質的に変わらない世界の有り様と、人となりは、「この世のあらゆる力は、結局のところ、無に帰する」ということと、「人はどこまで行っても、他者を傷つけずには生きることが出来ない罪人」であるということです。

そしてこれらの痛みを解決する唯一の方法と希望は、救い主イエスを世にお遣わしになった神の愛に気付かされること、その愛に依り頼むこと、そしてその神の愛に生かされ、その愛を实践することのみにあるということを見て参りました。

### Part One

ダニエル書11章の内容の大半が、ギリシア帝国が4分割されて出来た“北の王”と称するシリア・セレウコス王朝と“南の王”と称するエジプト・プトレマイオス王朝のせめぎ合い、騙し合い、戦い、争いについてですが、

その中でも特に多くの内容を占めていますのが、シリア・セレウコス王朝の8代目王であるアンティオコス4世・エピファネスの横暴ぶり、暴虐ぶり、狡さ、ずる賢さです。

ダニエル書11章の半分以上が、このアンティオコス・エピファネスについての記述になります。

ではなぜ、これだけの分量をアンティオコス・エピファネスに割いているのかと言いますと、神の民イスラエル民族に、信仰を理由に甚だ激しい迫害を加えたためなんです。

天地万物をお造りになり、メシアキリスト・イエスをこの世に送ることによって、その救いの業を完成させた唯一の神様を信じる信仰を侮辱し、馬鹿にし、卑下し、神を信じる者たちを殺していきました。

ダニエルからすれば、将来、自分たちイスラエル民族に起こる大迫害を知らされていることになります。

ダニエル自身も90年間生きてきた中で、信仰を死守するために種々雑多な迫害のみならず、獅子の穴に投げ込まれる程の酷い迫害を受けたこともありましたが、子孫たちにもそのような信仰ゆえの迫害が起こることを告げられました。

この迫害のことについては、来週以降、見ていきたいと思っています。

そして今日見ていきたいと思っていますのは、イスラエルに迫害を加えたアンティオコス・エピファネスという人の、人となりです。

先ほど、「この世のあらゆる力は、結局のところ、無に帰する」ということと、「人はどこまで行っても、他者を傷つけずには生きることが出来ない罪人」であると言いましたが、これは私たち人間にとって、痛みです。

蓄え頼った力が本質的な問題解決には役立つこともなく、最初から人を傷つけながら生きていなんて思う人はいないにもかかわらず、人を傷つけずには生きることが出来ない罪と悪が自分の内にあるという事実は、私たち人類にとって、根本的な痛みであり、大きな傷です。

この根本的な痛みと傷は、時代を超えて誰もが経験し持っているものですが、アンティオコス・エピファネスも例外ではありません。

アンティオコス・エピファネスと言いますと、傍若無人で残虐な権力者というイメージや書かれ方を良くされていますが、彼がなぜ暴力的で、横暴で、他者を傷つけることを意にも介さないような生き方をしたのかということをよく考え黙想してみますと、同情出来なくないと言いましょか、そうならざるを得なかった深い傷を抱えた、彼も一人の弱い人間だったのではないだろうかと思えてしまいます。

もちろん、彼が行った残忍な行為を肯定するということでなく、彼の持つ残忍性は、誰もが潜在的に持ち得るものですし、色や形や表現は違えど、誰もが日々の暮らしの中でしてしまっている内在する暴力性ではないだろうかと感じてしまいました。

つまり、アンティオコス・エピファネスの暴力性は、私たちとかけ離れた別世界の暴力性ではなく、正直に私たち自身を見つめたならば、その暴力性に共感できるということです。

## Part Two

私自身、自分の内に内在する暴力性についてはっきりと認識し、その問題を対面せざるを得ないきっかけとなった時間がありました。

それは、フラァ神学校での3年間の学びの時です。

私たち家族がアメリカに行った2015年の秋11月に、留学生家族を招待する神学校主催のサンクスギビングデーパーティーがありました。

アメリカでは毎年サンクスギビングデイ（収穫感謝祭）の時、実家に帰ったりして家族が一堂に集まって過ごすのですが（日本のお正月のような感じでしょうか）、留学生たちは帰る実家がないので、神学校でパーティーを開いてくれました。

で、そのパーティーの中で、何か出し物をした家族の中で、良かった家族には賞品をくれると言うので、私たち家族もいっちょやってやろうじゃないかということになりました。

そこで考えたのが、日本語の賛美を家族6人で歌うということでした。  
曲目は、長男の恒一がピアノの伴奏が出来る「神のなさること」にしました。

そして家族みんなでいざ練習をしようとした時、長男が、「伴奏なんかしたくもないし、出たくもない」と言うんです。

その時長男は、「来たくもないアメリカに無理やり連れて来られ、言葉も分からないし、学校も楽しくない」とプチ反抗期とストレスが重なって10kg以上痩せてしまった時だったんです。

でも私は、「お前は何訳の分からんことを言いながら、せっかく家族みんな楽しく久しぶりに日本語で賛美しようと言うのに、何で反抗するんだ」と叱りながら恒一を叩いて、ある意味無理矢理一緒に練習に参加させたんです。

少し罪悪感のようなものも感じましたが、その罪悪感を打ち消すかのように、「いやこれは、しつけだし、家族みんな辛い中で一緒に楽しい時間を過ごそうとしているんだから、親として当然のことをしたまでだ」と、自分に言い聞かせていたように思います。

そうこうして、サンクスギビングデイの当日を迎え賛美をしたら、評判が良くて賞と賞品を頂くことが出来たんです。

ただ、その歌う前に、曲紹介と自己紹介を兼ねてちょっと話す時間があつたのですが、自分の内にあつた罪悪感からか、笑いのネタにしてもらって自分のやったことを正当化したかったからなのか、軽い気持ちで「反抗期の長男を叩きながらピアノの伴奏をさせ、今日まで一生懸命に家族一同練習してきた日本語で歌う賛美を聞いてください」と話したら、会場にちょっと笑いが起こったんです。

「でまあ、賞も貰ったことだし、結果オーライ！」と思っていたのですが、後に私の指導教官になりますキョン・スー先生が私を呼んで、こんなことをおっしゃるんです。

「洪先生、さっき笑いながら長男を叩いた話をしてしましたが、あれは暴力ですよ！ 暴力は、暴力だと認識できない暴力の方が遥かに多いんです。あれは、暴力だということをはっきりと認識してください。」

思いもよらない言葉に（私自身プライドもあつたと思います）、余裕を装った笑みを浮かべながら、「はいはい、分かりました」という感じの反応しか出来ま

せんでした。

その後、キョン・スー先生の下で、“和解”をテーマにした論文を書くことになったのですが、「和解をテーマにするためには、自分の内にある暴力性と正直に直面しない限り、決して論文を書くことは出来ません」と言われました。

そしてその時から、自分の内に無意識の内に常態化し、正当化し、しつけや教育や訓練という名のもとに、経験し、受け継ぎ、染み付き、連鎖している暴力性と向き合うことになりました。

そうしてみますと、聖書に記録されているほぼすべての内容が、人間の暴力に関する話で、その暴力を罰し、赦し、回復を与える神の寛大で謙遜な話に見えるようになりました。

それまで私自身、よく笑い朗らかで、時には激しく怒ることもあるけれども、暴力とは無縁のどっちかという柔軟な方の人だと思っていましたが、キョン・スー先生の指導を受けていく中で、否応なしに、自分の暴力性を正直に認め、対面し、葛藤しなければならなくなりました。

妻との関係、子供たちとの関係、親や友人たちとの関係、そして牧師として社会人として、時には露骨に、時には上手いこと包装して、これまでずっと自分の暴力性を正当化しながら生きてきたということを認めざるを得なくなりました。

そして、キョン・スー先生がある時こんなことをおっしゃいました。

「洪先生、私たちの暴力性がどこから来たものかわかりますか？」

それは、親から、先生から、大人たちから受けてきたものなんです。

受けてきた色々な暴力による傷が、私たちの中でまた新たに同じような暴力を生み、その暴力がまた次の世代へと引き継がれて行ってしまいうんです。

そして厄介なことに、その暴力性を暴力だとほとんどの人が認識できずに、継承し、連鎖させてしまいうんです。

はっきりと認識できない暴力を受けた私たちは、認識も出来ないうちにそれが痛みとなり傷となって、その痛みと傷を認識も出来ずに、また認識の出来ない暴力という形で表してしまいうんです。」

### Part Three

アンティオコス・エピファネスのその暴力性は、私たちの共感出来ないものではなく、一步間違えればいつでも発射できる発射準備完了状態の私たちの暴力性と同じです。

正直に遡って、アンティオコス・エピファネスを見ますと、受けた暴力による傷が膿んでしまって、その痛みをどうすることも出来ずに、あたりかまわずぶちまけてしまっているようにも見えてきます。

アンティオコス・エピファネスがどんなことを経験し、ぶちまけてしまっているのかを見ていきたいと思います。

20節からです。

### ダニエル11：20（パワポ）

「彼に代わって、一人の人が起こる」という言葉は、19節まで登場してきましたシリアの6代目王のアンティオコス3世が反乱軍によって殺害された後、その長男セレウコス4世フィロパトルがシリアの王に即位したことを表わす言葉です。

ただ、このセレウコス4世フィロパトルには、父の代からずっと課せられてきた重い重いくびきのような重しのようなものがありました。

それは、父アンティオコス3世が（18節の内容になりますが）、ローマ軍に敗れ、その敗れた代償としてローマ軍に毎年1千タラントの金や銀を支払わなければならなくなってしまったことです。

1千タラントの金を現代の日本円に換算しますと、金1kg660万円として、1兆円相当にも上ります。

戦に負けたために、毎年1兆円もの大金をローマに支払わなければ、ならなくなってしまうました。

セレウコス4世フィロパトルは、父に代わって一国の王となり、ウハウハな生活を送るどころか、1兆円にも及ぶ「思いやり予算」を毎年計上し、ローマに支払わなければならなかったんです。

そこで、ヘリオドルスという人を財務長官に立て、国中を行き巡らせながら税を取り立てさせるのですが、

このヘリオドルス、国中を行き巡りながら税を回収し、国のことを知っていく中で力を蓄えたのでしょ。

謀反を企て、君主であるセレウコス・フィロパトルを毒殺してしまいます。

この一連の出来事を言い表しているのが、20節の「彼は国の栄光のために、税を取り立てる者を行き巡らすが、数日のうちに、怒りにも戦いにもよらずに滅ぼされる」という言葉です。

そしてこの後、登場してくるのが毒殺されたセレウコス4世フィロパトルの弟、アンティオコス・エピファネスです。

## Part Four

シリアは、ローマ軍に1兆円もの大金を毎年支払っていただけでなく、もう一つローマにしなければならなかった強制のような責務がありました。

それは、6代目王アンティオコス3世の次男、アンティオコス・エピファネスを人質としてローマに差し出すことです。

長男のセレウコス4世フィロパトルは国を継がなければなりませんので、次男のアンティオコス4世エピファネスが人質に取られたわけです。

アンティオコス・エピファネスは、権力者たちの大人の事情に翻弄され、14年もの間、人質としてローマに捕らわれの身となってしまいました。

この1兆円もの大金を献上しながら、人質まで取られている当時の様子を思い巡らしていましたが、一つのことが思い浮かんできました。

それは、「在日米軍駐留経費負担」と称する通称「思いやり予算」を毎年計上し、累計7兆円以上の膨大な額をアメリカに支払ないながら、米軍基地のある沖縄などが人質として献上され、痛みを抱えている人がたくさんいるという事実です。

時代や場所や国が変わっても、人間やること皆同じです。

いくさをし、勝った負けたと権力者や利権者たちがプライドをかけ、そのプライドの争いに巻き込まれる人々。

昔も今も変わりません。

人質となっていたアンティオコス・エピファネスは、人質ではあってもシリアの王の息子なので奴隷のように扱われることはありませんでしたが、シリアの王子としての将来を思い描くことなんか出来ない屈辱と、無念さを抱いたであろうことは、想像に難くありません。

そして何よりも、彼を怒りと憎悪に駆り立てたのは、父を始めとする家族や母国に、人質として売られた、出された、裏切られたという思いとその受けた暴力的行為が、彼の根底に痛みと傷として根付いてしまったのではないだろうか。

そして痛みのはけ口として、当然のように、また暴力的行為がなされていったのではないだろうかと思えます。

このようなアンティオコス・エピファネスのことを、21節以降に記していますが、まずは21節から見てみたいと思います。

**ダニエル11：21 (パワポ)**

一人の卑劣なものが起こります。

この卑劣なものと書かれている者こそ、兄セレウコス・フィロパトルに代わって、シリアの8代目王となった悪名高き、アンティオコス・エピファネスです。

なぜ卑劣だと書かれているのかと言いますと、人をだまし、欺き、巧みに悪事を働きながら、不法に不正に、王に成り上がったからです。

本来、兄のセレウコス・フィロパトルが亡くなったならば、その次の8代目王になるのは、息子のディメトリウスなのですが、弟のアンティオコス・エピファネスが王になってしまいました。

ローマの人質となっていたアンティオコス・エピファネスは、悪巧みを計り、甥っ子のディメトリウスをローマに呼び寄せ、ディメトリウスを自分の代わりに人質としてローマに残して、自分は祖国シリアに帰ってしまうんです。

そしてその帰路で、願ってもない話、思わぬ収穫のような知らせを聞きます。

それは、国に帰ったら、真っ先に相まみえ倒すことも覚悟しなければならなかった兄セレウコス4世フィロパトルが、財務長官であった臣下のヘリオドルスに毒殺されたという知らせでした。(先ほどの20節の内容です)

アンティオコス・エピファネスにしてみれば、とてもラッキーな知らせでした。すぐに跳んで帰り、ヘリオドルスを退け、自分が王位に就きました。

しかし先ほども言いましたように、本来ならば、甥っ子のディメトリウスが王とならなければならないので、国内の大多数の大臣や太守たち、そして周辺国家の王たちも、ディメトリウスをローマから呼び戻し、王に即位させなければならないと主張しますが、その反対勢力を制圧します。

どのように制圧したかと言いますと、まず、周辺国家の権力者たちに会い、あらゆる高価な手土産を渡しながら手なづけ、その見返りに正式なシリアの王としての承認を受けます。

そしてその勢いと共に、国内の反対勢力を武力で制圧しました。

ここでついに、誰も抵抗できないような状態を作り上げて、王となったわけです。

これが卑劣だと言われる所以です。

## ダニエル11：22 (パワポ)

ここに出てきます「洪水のような軍勢」と「契約の君主」とは、それぞれ、シ

リア国内の抵抗勢力と不法な王位継承に反対したイスラエルの実質的指導者であった大祭司オニアスを表していると言われ、アンティオコス・エピファネスに一掃され、打ち砕かれていきました。

### Part Five

この後23、24節でも、同盟を結んだ者とは、自分の願いがかなった後には同盟関係をぶち壊し、欺き、裏切ります。

そしてさらに力を蓄え、侵入し、奪い、分捕っていきます。

何のためらいもなく、はばかることもなく、縦横無尽に暴虐を働いていきます。

特に、自分が王となった時に不正な王位継承だといったイスラエルユダヤに対しては、尋常じゃない迫害と侮辱を加えていきました。

アンティオコス・エピファネスが受け抱えていた癒えない痛みと傷がどれほど大きかったのかを、ある面では表しているかのようです。

アンティオコス・エピファネスのような痛みや傷は、考えようによっては誰もが持っていますが、ここまで大々的に暴力を表現することは、まあ普通は出来ません。

なぜなら、こんな富も力も、普通は持ってないからです。

でも、目に見える形での痛みによる暴力の大きさには違いはあれど、私たちの内に暴力性があることは否めません。

ダニエル書11章は、暴力には、終わりがあり、限りがあることも教えてくれています。

### ダニエル11：24 (パワポ)

「時が来るまでのことである。」

この言葉は、暴力の時間的物理的な終わりだけを意味している言葉ではなく、霊的な回復を表す言葉でもあるように思えます。

つまり、神の愛を受けていることに気づき、知り、依り頼み、神の愛に生きる者には、もうこれ以上、暴力によって生み出された痛みや傷に縛られ、癒えない傷のはけ口としての暴力に走る必要がなくなるということです。

事実ダニエルも、人質としてバビロンに、ペルシアに捕らえられても、また国の権力者になった後で人質出身だと揶揄されても、受けた暴力による痛みのはけ口として暴力に走ることもなく、走る必要もありませんでした。

なぜならば、メシヤキリスト・イエスを与えるほどの神の愛を知り、経験したからです。

ヨセフもそうです。

実の兄弟全員に裏切られ、奴隷として売り飛ばされ、やがてエジプトの宰相という実質中東世界ナンバーワンの権力を手にしたにもかかわらず、自分に暴力を働いた兄たちに受けた傷の腹いせに、暴力をもって仇を返すことが出来たにもかかわらず、そのようなこともせず、

受けた傷のはけ口として、手にした権力をなりふり構わず振りかざすことも出来ましたが、そうすることはありませんでしたし、そうする必要もなければ、そうすることに価値も喜びも見出すこともありませんでした。

なぜならば、ひとり子イエスを与えるほどの神の愛を知り、経験し、依り頼んだからです。

### Conclusion

自分を裏切り、奴隷に売り飛ばした兄たちにエジプトの権力者となったヨセフが発した言葉を見てみたいと思います。

#### 創世記 45 : 3 - 5、8、15 (パワポ)

暴力には限りがあり、終わりがあります。

しかし、その限りと終わりは、罪人である私たち人間が定めることは出来ません。

神の愛によってのみ、限りと終わりが来ます。

神の愛に触れられ、神の愛に気づき、神の愛に生かされ生きようとする時のみ、暴力は一切の効力を発揮出来なくなります。

私たちの受けてきた、そして与えてきた暴力による痛みと傷は、神の愛に触れた時、限りを迎えます。

やられた、とられた、みさげられた、差別されたという癒えないように思われる痛みが、イエス・キリストの身代わりの愛に触れられますと、意味があるものに様変わりし、恵みに変わり、人の痛みが我が痛みのように感じられるようになります。

アンティオコス・エピファネスと何ら変わる事のない私たちに、神はキリストとの出会いを与えてくださいました。

なおも、エピファネスのように暴力に打ちひしがれた痛みと傷をどうするこ

とも出来ずに、身悶えし、暴力だとも気づかずに、暴力を知らず知らずのうちにはけ口にして自分と人を傷つけている、神の愛を、キリストの愛を必要としているのが私たちであります。

だから伝えませんか？

まずは私達自身に神の愛を伝え、そして、私達の周りにも伝えたいと思うんです。

その痛みに終わりがあるという事実を伝えましょう。

キリスト・イエスの愛を伝えましょう。

お祈りいたします。

祝祷：創世記 4 5 : 5